

(十一) 鳶が巢城と城下町

西林木町の奥の谷・川北・中組・前組・東組と東林木の阿土谷の一部を含んだ地域を、昔は地元では鳶が巢城城下町と言っていたと古老が話してくれました。

応仁の乱から始まった戦国時代の永世八年(一五一二)、尼子経久の配下である宍道久慶は、楯縫郡の大部分・神門郡と出雲郡の一部などを加増されたため、それら所領の全域を掌握するために鳶が巢山が最適と痛感し、この山に砦を構築して宍道氏の本拠としました。そして、宍道久慶は鳶が巢城の整備と城下町の整備を行いました。天文十二年(一五四一)子隆慶は尼子晴久に反旗し大内軍に参戦して尼子と戦い鳶が巢城は落城しました。

しかし、およそ二十年後、毛利元就に従って戦に参戦した宍道隆慶は尼子を滅ぼし鳶が巢城を取り戻したのです。

その後、宍道隆慶の子政慶は、僅か三十年足らずでしたが、城下の町づくりや農村の復興等に力を注いだのです。

今の鳶巢にはその頃の名残が地名として残っています。

戦国期の鳶が巢城と城下町復元

鳶が巢城に関しては一九九〇年調査の縄張図を参考にしました。また城下町は「ふるさと鳶巢物語」を参考にしました。

しかし、発掘調査が不十分なため不明な部分が多く、今後の検討が必要です。

